

「女性論」プロジェクト研究報告

A Report of the Women's Studies Project

「女性論」プロジェクト研究の歩みと今後の課題

—昨年度までの活動の総括、並びに今後の活動について—

A Progress of the Women's Studies Project

—Review of Past Activities and Next Year's Research Plan—

梶山女学園大学人間関係学部教授

吉田 あけみ

Akemi Yoshida

梶山女学園大学現代マネジメント学部教授

東 珠実

Tamami Azuma

梶山女学園大学人間関係学部教授

小倉 祥子

Shoko Ogura

梶山女学園大学国際コミュニケーション学部教授

影山 穂波

Honami Kageyama

梶山女学園大学人間関係学部教授

藤原 直子

Naoko Fujiwara

1. 緒言

本年度は、昨年度までの13年間の女性論プロジェクトについて概観し、これまでの活動を振り返った上で、今後の女性論プロジェクトの活動の方向性を考える作業を実施した。

具体的には『梶山人間学研究』への報告を読み返し、統一の視点から研究内容を整理した。その上で、それらの活動の連関図として表1「女性論」プロジェクト研究報告（2005～2017）にみる研究動向、図1「女性論」プロジェクト研究の総括（1）全体像、図2「女性論」プロジェクト研究の総括（2）学生・

生徒のキャリア形成能力育成の視点を作成した。これまでの研究蓄積の全体像、個々の研究における学生・生徒のキャリア形成能力育成の視点を横断的に概観し、今後の研究活動の方向性について検討したものである。

2. 年度ごとの報告書のまとめ

以下に年度ごとの研究活動を報告書から、(1)研究報告タイトル、(2)研究の目的、(3)研究の方法、(4)研究結果、(5)提案や新たな課題、の5項目にまとめた「概要シート」を提示する。

第1回（2005年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

タイトルなし

- ①教員に対するインタビュー調査
- ②学生に対する将来のライフスタイル等に関するアンケート調査
- ③本学における女性学・ジェンダー関連カリキュラム調査

(2)研究の目的

- ①本学で育てたい女性像および男女共同参画社会全般に関する専任教員の考えを知る。
- ②本学の学生がどのような女性・人間になりたいと考えているかについて明らかにする。
- ③本学園における2005年度のカリキュラムの特徴や問題点を明らかにする。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

- ①26名の専任教員（高校8・大学18）に対するインタビュー調査（2005.12～2006.12）
調査項目8つ：どんな女性になってほしいか、そのための教育活動の実践、本学園の生徒・学生が最も望む将来像、女子教育機関であることについて在校生及び卒業生がどう考えているか、今後意識的に強化すべきこと、男女の望ましい関係や生き方について、WLBについて、男女共同参画社会と女子教育機関との関係について
- ②学生169名（現マ110・生活59）に対するアンケート調査
調査項目4つ：理想の女性／人間像、理想／予想されるライフスタイル、望ましい仕事・家庭生活・地域活動への関わり方、性役割に対する意見
- ③各学校・大学学部等の現状やシラバスを踏まえ、科目による位置づけ、学年配当、テーマ等について調査

(4)研究結果

- ①聞き取り結果を年齢順で示した。内容についての具体的な分析は行っていないが、教員の個性や多様性が見て取れる。
・男女共同参画社会への指向性などは世代を超えた共通点であった。
・学生たちが将来を考える際には、多様で具体的な「私にも手が届きそうな」モデルが役立つのではない。
- ②4項目について全体的な特徴と学部別にみた特徴について各項目について示されているが、ここでは全体の概要を記す。
・学生は自分の生き方を持ち、他者への思いやりのある女性・人間になりたいと考えている。
・現マでは「行動的な女性・人間」、生活では「心豊かで前向きな女性・人間」を志向。
・学生の志向性は、教員が育てたい女性像・人間像に近いものであるが、一方で教員が望むマナーに関する側面の重視については学生の志向に一致するところが見られない。
・学生の職業志向はあまり高くなく、理想としては就業継続希望だが、現実にはそうならないと考えている者が多いこと、ライフステージに応じたWLBを両立させ、自分らしく生きようとする志向性が高いことが特徴的である。
- ③ジェンダー関連科目は「核科目群」「周辺科目群」「演習科目」の3つに分類できる。
・本学園全体における女性学・ジェンダーに関連するカリキュラムは、ある程度の開講数と多様性を備えている。しかし、周辺科目群はあくまでも周辺である。
・核科目群の多様性や強靱さは、核科目群でしか築けない。
・本学園の女性学・ジェンダー関連カリキュラムは、核科目群について不十分である。学部間格差の是正・「人間になろう」という建学の精神と関連させた全学園での拡充が必要であり、望まれる。

(5)提案や新たな課題

- ①教員に対するインタビュー結果を何らかの形で学生へ提供、女性学・ジェンダー関連カリキュラムの学部間格差の是正のためのプログラム開発と実施、女性の多様な生き方の実践者と学生たちのワークショップの開設という3点を提案した。
- ②全学部の学生対象調査の実施
- ③「人間になろう」という建学の精神と関連させた全学園での拡充が必要であり望まれる。

第2回（2006年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

- ①男女共同参画を推進する女子大学における女性人材育成プログラム
 —お茶の水女子大学「女性リーダー育成プログラム」と奈良女子大学「地域の変革を促す女性人材育成プログラム」の比較研究—
- ②リーダーシップの育成と大学教育～多様性と環境変化への対処に向けて～

(2)研究の目的

- ①女子大学の草分け的存在である2大学における女性の人材育成プログラムの検討
- ②女子大学におけるリーダーシップ研究とその実践活動の方向性について示唆を得る

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

- ①文献資料・HP情報
- ②文献研究

(4)研究結果

- ①お茶の水女子大学のプログラムの特徴
- ・文科省の支援のもと、女性支援室が中心となった4カ年計画の特別教育プログラム
 - ・優れた女性リーダーに必要な「資質とノウハウとパワー」を強化・育成するための講義・実習を設置。学部生・大学院生対象のプログラムがあり、通常の授業科目から関連科目が指定され、そのうち必修科目および選択必修科目から10単位以上履修
 - ・海外において実践する計画書を提出させ、優れた計画を立案した学生を海外派遣
- ➡ 職業分野における女性リーダーとして活躍できる人材育成のプログラムである。
- 奈良女子大学のプログラムの特徴
- ・生活環境学部が中心となり、現代GPの取り組みとして実施。
 - ・地域社会の変革に関する6つのテーマと3つのフィールド
 - ・全学共通科目内のキャリア教育科目<キャリアプラン科目>において4科目開講
 - ・生活環境学部においても新設。
- ➡ 地域社会の連携のもと、社会の多様な場面で求められる女性人材を実践的・体験的学習を通して育成するプログラムである。
- ②リーダーシップ理論の研究をたどる。
- ・リーダーシップ研究は、大きく「特性理論」と「行動理論」に分類される。
 - ・行動理論研究は1930年代から展開され、リーダーの行動特徴を特定する観点の研究から始まり、大きく分類すると「人間志向型」と「タスク志向型」があり、優秀なリーダーは両方併せ持つ行動をする。
 - ・その後、リーダーシップ研究は、リーダーと構成員と状況作用に焦点化された。
 - ・リーダーシップ教育とその実践は社会の要請とニーズの高まりを背景とする。
 - ・経済活動の活発な中部圏においてはその意義は大きい。

(5)提案や新たな課題

- ①本学においては、「都市部における地域との連携」を独自性とするプログラムの開発が有効である。
- ②リーダーシップ理論は、どのような行動がリーダーシップに有効か、その特徴や習得方法など大学教育においてその重要性は大きくなるのではないか。

第3回 (2007度)「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

学校段階別にみたライフスタイルの将来展望－女子学園の実態調査をもとに－

(2)研究の目的

- ・女子学園である本学園に通う生徒・学生が、結婚・子育てならびに家庭生活（家事分担、家計管理）と就業選択に関して、どのような将来展望をもっているのか明らかにする。
- ・学校段階別にライフスタイル展望にどのような違いがみられるのか把握するとともに、その意識や志向の形成プロセスを明確にする。
- ・女子の発達段階に応じた教育・学習の在り方を考える。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

眉山女学園中学・高等学校・大学に通う生徒・学生に対するアンケート調査

中学生68名、高校生229名、大学生723名、合計1,188名に対し2007年7月～11月実施

質問項目：①結婚に対する展望（結婚の意向、年齢、パートナーの年齢、パートナーに求める条件）、②働き方に対する展望（結婚・出産・子育て終了後の就業意向）、③子育てに対する展望（子どもは欲しいか、子どもをもつ時期、子どもの養育担当者）、④家庭生活に対する展望（家事労働の担当者、家計管理の担当者）、⑤自由記述形式で「将来の私」に対する理想のイメージや「人生の中で特に大切にしたいこと」などの回答を求めた。

(4)研究結果

アンケート調査の主な結果は以下のとおりである。

- ・結婚に対する意識については、9.5割が結婚すると回答し、結婚希望年齢については、いずれの学校段階においても20代後半が最も高い割合である。
- ・全体の約半数は、「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦、その後パートで働く」を希望している。
- ・「退職後専業主婦に従事する」という回答割合は、学校段階が上がるごとに減少している。一方で、「結婚・出産後もフルタイムで働く」の回答割合は上昇している。
- ・子どもをもちたいとの回答は全体の9.5割であり、時期については結婚後2～3年後が最も回答割合が高い。
- ・家事については、「おもに自分」が全体の49.9%、「自分がすべてする」5.3%、「二人で平等に」は42.4%であり、女性である自分が家事を行うとする者が半数以上を占めており、性役割を肯定する傾向が強い。家計管理については、約7割が「自分が管理する」と回答しており、現実的に「財布の紐をにぎる」のは女性という日本の主婦の慣行をそのまま内面化している傾向にある。

相対的に多くの生徒・学生がイメージする将来のライフスタイルは、以下のようである。

- ①1、2歳年上の家庭を大事にし性格がよく経済力のあるパートナーと20代後半で結婚
 - ②結婚後、2～3年たったら子どもを二人産む。
 - ③出産後は仕事をやめ、子育てに専念する。
 - ④子育てが一段落したら、パートで再就職する。
 - ⑤結婚生活においては、家事は主に自分が行い、子育ては二人で協力しあう。
 - ⑥家計は自分が管理する。
- 以上の要素は、旧来型の女性の生き方に通じる部分が多い。
- ・母親世代のライフスタイルが1つのロールモデルになっているのではないか。
 - ・学校段階の進行とともに、ライフスタイル展望は変化し、大学3、4年では、結婚、出産後でもフルタイムの就業志向が高まる。

(5)提案や新たな課題

- ・本学園の生徒・学生たちに対して、低年齢から多様なライフスタイルがあることを認識させ、ライフステージで直面する選択に柔軟かつ適切に対応する力を身につけさせる。
- ・結婚と選択について、より具体的かつ現実的なイメージがもてるようにする。
- ・結婚を選択した場合においても、パートナーと互いに自立し、支え合い、個性を能力として高めながら豊かな家庭生活を創りだすことのできる力を育む。

第4回（2008年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

女子大生の専攻分野別にみたライフスタイルの将来展望—学部別比較研究—

(2)研究の目的

女子大生の将来の理想的なライフスタイル像を学部別に比較し、その特徴を明らかにする。また、学部別の傾向を踏まえ、それぞれの分野を専攻する女子学生が、男女共同参画社会において個性や能力を活用した生涯を送るために、どのような教育的課題があるかを検討する。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

2007年7月～11月に実施した将来の理想的なライフスタイルに関するアンケート調査結果から大学1・2年生のデータを抽出し、以下の事項を学部別に比較した。

- ・結婚に対する展望（結婚の意向、結婚年齢、パートナーの年齢、パートナーに望む条件）
- ・働き方に対する展望（結婚の意向、結婚年齢、パートナーの年齢、パートナーに望む条件）
- ・子育てに対する展望（子どもは欲しいか、子どもをもつ時期、子どもの養育担当者）
- ・家庭生活に対する展望（家事労働の担当者、家計管理の担当者）

(4)研究結果

1. 全体の傾向

結婚・出産に対する思考が強く、性役割を肯定する傾向が顕著にみられた。

2. 学部別にみた特徴

- ①「働き方に対する展望（結婚・出産・子育て終了後の就業意向）」については生涯、フルタイム就業の意向は現代マネジメント学部で特に強く、生活科学部、教育学部がこれに次ぎ、人間関係学部と文化情報学部では、結婚・出産退職後の専業主婦志向が相対的に高い。
- ②「パートナーに望む条件」が多いのは生活科学部、少ないのは教育学部、「家庭を大事にすること」や「性格」を特に強く求めるのは生活科学部と人間関係学部、「経済力」は生活科学部と現代マネジメント学部、「健康」は生活科学部と国際コミュニケーション学部で相対的に高い。また、「子ども好き」は、教育学部と人間関係学部で高い。
- ③「パートナーの年齢」については、相対的に年上志向が強いのは国際コミュニケーション学部、同年代を理想とする傾向が強いのは生活科学部である。「将来の結婚意向」については、大部分の学生は将来結婚したいと考えているものの、相対的にみると、独身志向は人間関係学部で、事実婚志向は文化情報学部で高い。また、結婚後すぐに子どもをもちたいとする者は生活科学部で最も多く、教育学部、人間関係学部がこれに次いだ。
- ④各学部の学生の理想のライフスタイルを整理すると、生活科学部は家庭と仕事の両立や経済・健康などの多様な価値を重視し、子育てへのこだわりも大きい「マルチ志向型」、現代マネジメント学部は「仕事・経済重視型」、教育学部は「仕事・子ども重視型」、人間関係学部は「家庭・子ども重視型」、文化情報学部は「出産退職志向型」、国際コミュニケーション学部は「健康・子育て志向型」と理解することができる。なお、これらの結果から、生活科学部、現代マネジメント学部、教育学部、人間関係学部では、学部独自の教育理念が、学生たちの理想のライフスタイルに影響を及ぼしていると推察される。

(5)提案や新たな課題

女子大学である本学に通う学生たちが今後の男女共同参画社会において、職場と家庭・地域でバランスよく個性や能力を活かした生涯を送るためには、「経済的な自立や職業的な生活の継続」という点については人間関係学部、文化情報学部、国際コミュニケーション学部などで、「家族観や子育て観の涵養」という点については現代マネジメント学部で、「ライフスタイル全般に関する考え方」については文化情報学部、国際コミュニケーション学部で、より充実した教育機会が提供される必要がある。

第5回（2009年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

女子大卒業生のライフコースに関する一考察—25事例の分析—

(2)研究の目的

卒業生の卒業後のライフコースやライフスタイルを明らかにすることにより、現在の生徒・学生たちに対し、今後のキャリアデザインに関する示唆を得るとともに、女子学園の存在意義についても検討する。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

2009年8～10月に、27～37歳の本学卒業生25名に対し、卒業後のライフコース等に関する以下の事項について、インタビューを行った。

- ・学生時代の理想のライフコースと現実のライフコース及び今後の展望
- ・母親のライフコースとそれに対する評価
- ・学校、大学で学び役立っている授業・活動、学んでおきたかった授業・活動
- ・在学生・在校生へのメッセージ

(4)研究結果

- ①学生時代に考えていた家族形成（結婚・出産）に関する理想のライフスタイル（20歳代後半ぐらいに結婚、その後2～3年のうちに出産）を実現している卒業生は、27～37歳の時点で、半数強である。（ただし結婚していて子どもがいない者がいずれ出産するという前提に立てば、全体の約7割が理想の家族構成を実現することになる。）
- ②学生時代に考えていたキャリアに関する理想のライフスタイルを実現している卒業生の割合をみると、フルタイム志向であった者は15名中8名（53.3%）、M字型志向であった者は7名中4名（57.1%）、専業主婦志向であった者は3名中1名（33.3%）である。フルタイムを理想に掲げながら実現しなかった者の多くは教員志望である。また、M字型の理想を実現できていない理由は、未婚であることや、経済的に余裕があり働く必要がないことによる。さらに、専業主婦志向であった者がそれを理想としなくなるのは、就職経験によって身につけた能力を活かし続けたいと考えるためである。
- ③母親のライフコースについては、「専業主婦であった母親」に対しても「働いていた母親」に対しても、ほとんどの者が肯定的であった。また、17名の既婚者のうち、母親の生き方をロールモデルとしたライフコースをすでに歩んでいる者は、「専業主婦であった母親」について3名、「働いていた母親」について7名である。
- ④卒業後に役立っている授業科目については、総じて講義科目よりは実習・演習科目の方が多い。学部別にみると、生活科学部では衣生活や食生活、文学部では女性の生き方、人間関係学部ではケースメソッドなどを掲げる者が多い。一方、学生時代に学びたかったものとして、インターンシップやキャリア教育など、就職に関連する授業や活動を挙げる者が非常に多い。
- ⑤卒業生から在校生・在学生に対し、何事にもチャレンジすること、よい友人関係をつくりあげること、人生設計に対する示唆等に関するメッセージが寄せられた。

(5)提案や新たな課題

本調査により、卒業生のライフスタイルやライフコースのあり様は、母親の生き方だけでなく、母親以外のロールモデルとなる女性との出会いが将来像に強い影響を及ぼしている点、女性の生き方に関する学習、教育への評価や希望がみられる点、大学併設高校において受験勉強に振り回されることなく展開されている豊かな教育活動が高く評価されている点などが確認されたことから、今後は、女性の豊かなライフスタイルやライフコースに関する総合的な教育プログラムを作成することが必要である。

第6回（2010年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

女子学園におけるキャリア教育用教材開発に関する実践的研究

(2)研究の目的

女子学園においてキャリア教育を実践するための教材に求められる諸要素を明らかにする。また、それらの諸要素を踏まえた女子学生・女子生徒のためのキャリア教育用教材の試案についても提案する。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

既存の中学生・高校生・大学生を対象とするライフデザインやキャリアデザインに関する10種類の教材（小冊子4、ワークブック3、DVD2、Webコンテンツ1）を収集し、それぞれの教材制作の趣旨、対象者、目次（内容構成）、特徴等を比較・分析する。

(4)研究結果

10種類の教材に共通する事項を中心に、女子学園における効果的なキャリア教育用教材に必要な諸要素について検討した結果、同教材には次の5つの内容を含むべきことが明らかとなった。

- ①長期的な時間的要素：過去から現在、未来へとつながる時間の流れ
- ②短期的な時間的要素：仕事時間と私生活時間のバランス
- ③社会的な空間的要素：社会的存在としての「私」と家族、社会を結ぶ関係性
- ④個人的な空間的要素：仕事、家事・育児、余暇・学習などの諸活動
- ⑤基本理念：女子学園の歴史及び使命や、男女平等、男女共同参画社会の理念（図参照）

また、これらを踏まえ、女子学園における効果的なキャリア教育用教材として、以下のような内容構成案を提案できた。

序章 知っていますか？ 椋山女子学園のこと

第1章 「私」をみつめよう

（歴史、現在、未来に向けて）

第2章 私と家族

（社会の中で生きる私、社会の変化と今の私）

第3章 私と学び

（多様な家族形態、自分の家族とその関係）

第4章 私と労働

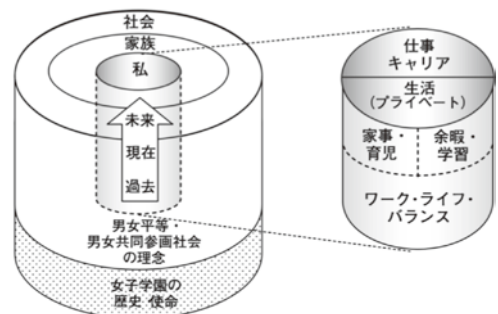
（女性労働の変遷、日本の女性労働、女性の雇用）

第5章 私のワーク・ライフ・バランス

（ワーク・ライフ・バランス社会、生活時間、理想のワーク・ライフ・バランス）

第6章 私の未来

（男女共同参画社会、未来の設計—ライフプランとキャリアデザイン—）



(5)提案や新たな課題

上記、教材案を提案した（論文刊行時において、すでに冊子教材「私のキャリアマップ」を制作済み）。次年度以降、この教材を用いたキャリア教育を展開していく。その際、男女共同参画社会に生きる学生・生徒たちが、女子学園の歴史的・社会的存在意義に目を向けながらも、性別にかかわらず、自らの個性や能力を最大限発揮できるようなキャリアデザインに取り組むことができるように支援を行う。

第7回 (2011年度)「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

女子大学卒業生のライフコースと女子大学の特性に関する研究—20代から80代の卒業生へのインタビュー調査を手掛かりに—

(2)研究の目的

女子大学の特性や存在意義を追及することを目指し、幅広い年代層の卒業生からライフコースの聞き取りを行うことで、戦後経済の発展段階において女子大学がどのような役割を果たしてきたのかを振り返る。また、男女雇用機会均等法の制定を経て、女子大学の社会的期待がどのように変化してきたのかをとらえ、今後の女子大学の社会的使命について追及する。

(3)研究の方法 (調査対象者／調査方法／分析方法)

20～80代までの卒業生10人に、2011年9月～12月にインタビュー調査を実施した。質問項目は、経歴、本学及び学部への進学を選択した理由、当時の学生生活、大学で学んだことや、大学で築いた人間関係がその後の人生でどう活かされたのか、の4項目である。

ヒアリング内容は、①質問項目ごとに、個別にまとめる、②戦後の経済・女性政策の推移と本学部の学部設置状況を併せて図示し、それぞれの卒業生のライフコースについて時代ごとに特徴を把握する、③戦後の経済・女性政策の推移と、それに伴う大学への進学動機の傾向を把握する、④戦後の経済・女性政策の推移を軸に、学生生活の構成要素と特徴をつかむ、⑤その後の人生に活かされた学生時代の学びや人間関係について概観の5視点から分析した。

(4)研究結果

戦後の復興期ないし高度経済成長期 大学へ進学する女性が限られていたこの時期には、家庭的な雰囲気のある女子大学で、良妻賢母の精神と家政に関する専門的知識を学ぶとともに、良家の子女の嗜みとして茶道や華道を習ったり、料理や刺繍を楽しんだりしながら学生生活を過ごした。卒業後は家政に関する専門的な知識やスキルを家庭生活と職業生活ないし社会貢献活動の各領域で活かし、高い教養を備えた先駆的な女性としてのライフコースを歩んできた。当時の大学の存在意義とは、良家の子女に専門性の高い家事的知識やスキルを教授し、それを家庭だけでなく職業的能力として活用できるレベルにまで高め、家政系の教員など、当時の数少ない専門職の女性を世の中に輩出する役割を担っていたといえよう。

男女雇用機会均等法制定前後の女性政策発展期 国際婦人年以降の女性の地位向上への動きが均等法に結実した時期に女子大学で学んだ女性たちは、当時、人気の高い短期大学部に進学し、ファッションブルで華やかな学生生活を過ごした。卒業後はバブル景気の恩恵を受け、大手企業への就職を果たすものの、結婚・出産を機に初職を退職し、子育てが一段落すると再就職や起業、社会貢献活動を行うなど、自分らしい生き方を求めて、変化の多いライフコースを歩んだ。ここから当時の大学は、女性の生涯にわたる多様な生き方が可能になるような教養と専門的知識の素地を提供する役割を果たしていたといえよう。

男女共同参画基本法制定以降の女性政策発展期 21世紀初めの女子大学に学んだ女性たちは、周囲の勧めを動機の一つに、意識的に女子大学に進学した。在学中は多様なロールモデルから女性の生き方を学んだり、演習などで企画力や実践力を身につけたりした。アルバイトで貯めたお金で海外旅行に出かけるなど、自立型の行動力を身につけている。卒業後は総合職で就職をし、今後のキャリアアップを目指している。こうした現状からは、現在の女子大学では、男女共同参画社会の実現を目指し、行動力や主体性、リーダーシップをもち、結婚、出産を経てなお、男性と同等に職業能力や社会的能力を発揮できる活力ある女性たちを輩出することが求められている。

(5)提案や新たな課題

女子大学の存在意義とは、自らの個性を、家庭生活と地域、職場のいずれの領域においてもバランスよく活用し、柔軟に生きることができると女性を育成することである。一人の人間として人生のさまざまなステージにおいて、周囲の人々との関係を大切にしながら、自らの生きる道を自ら切り拓いていくことができるような女性を育成するための人間教育が、女子大学の一貫した社会的使命である。こうした結論を受けて本プロジェクトでは、今後も広く卒業生のロールモデルの紹介や、生涯にわたるキャリア教育の一助としての教材を作成していくことを今後の課題とする。

第8回（2012年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

女子大生のライフスタイルの将来展望に関する近年の動向分析

(2)研究の目的

世論調査における固定的な性役割分業意識では、女性の若い世代において肯定的な割合が増加傾向にある。そこで本研究においては、女子大生のライフスタイルの将来展望に関する近年の動向について、アンケート調査を実施しその結果を分析する。また5年前の在學生にも同様の調査を実施しているため、この間の変化について明らかにすることを目的とする。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

現代マネジメント学部、人間関係学部、生活科学部在籍の1、2年生を調査対象（N=420）とし、「ライフスタイルの将来展望に関するアンケート調査（2012年調査）」を実施した。調査項目は、以下の4項目である。

- ・結婚に対する展望（結婚の希望、結婚する年齢、パートナーの年齢、パートナーに望む条件）
- ・働き方に対する展望（結婚後の就労形態）
- ・子育てに対する展望（子どもの有無、子どもをもつ時期、子どもの養育担当者）
- ・家庭生活に対する展望（家事労働の担当者、家計の管理者）

調査結果は、全体および学部別に集計し、2007年調査結果との χ^2 二乗検定を行った。

(4)研究結果

女子大生のライフスタイルの将来展望に関する近年の動向の特徴として、以下の3つがあげられた。

- ①女子大生がイメージする結婚や子どもをもつ時期、パートナーの年齢などについては、現在の平均的な状況に近いかたちを理想としている。夢や憧れではなく、より現実的、客観的に将来について考えるようになってきている。
- ②将来のパートナーには、`稼ぎ手役割、を求める志向が高まっており、自分自身は子育て期間は仕事を中断するM字型就労を希望する傾向が強くなっている。
- ③家事労働はパートナーと平等に負担したいとする者が増えてきているが、一方では家計管理は自分が行いたいと思っている。

(5)提案や新たな課題

女子大生が抱える将来展望の矛盾点が明らかになったことから、将来の自分自身とパートナーと家族との、ワーク・ライフ・バランスのとれた生活の在り方を具体的にイメージすることができるような、男女共同参画教育、キャリア教育が望まれる。

また、性別を問わず、一人の人間として生涯働き続けることの意味を、個人の問題、社会の問題として多面的にとらえ、それを目指したいという意欲を高める教育が求められる。そのためには、男女共同参画社会の理念や、その実現に向けた法整備の背景と現状を十分認識させること、諸外国の女性のライフコースとの違いを知るなど、高等教育を受けた女性たちが、その能力を生涯にわたって広い領域で活躍できるような教育の展開が急務である。

第9回（2013年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

女子大学におけるキャリア教育の比較研究

(2)研究の目的

女子教育の伝統を有し、「女子総合学園」におけるキャリア教育の現状をとらえ、キャリア教育の実態を比較分析する。そこに共通する特徴と各大学独自の取り組みを把握し、女子大学におけるキャリア教育の全体像を明らかにすることを目的とする。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

中学校・高等学校・大学を擁する私立女子総合学園のうち、関東、中部、関西地方にある100年以上の歴史を有する伝統校から12校（大妻女子大学、共立女子大学、実践女子大学、昭和女子大学、白百合女子大学、聖心女子大学、日本女子大学、フェリス学院大学、金城学院大学、相山女学園大学、京都女子大学、神戸女学院大学）を選択し、2013年8月～12月にかけて、各大学・学園のHPに掲載されているキャリア教育関連情報を中心に、掲載情報を分析した。分析のために収集した情報は、以下の項目である。

- ・各大学（学園）の概要（設立年、建学の精神、学部数・学部名、在籍者数）
- ・キャリア教育のコンセプト
- ・キャリア教育の体制
- ・キャリア教育科目
- ・キャリア教育に関するGP等の取得状況
- ・キャリア教育に関するその他の特徴

(4)研究結果

- 12校の女子総合学園における女子大学のキャリア教育についての研究結果は、以下のとおりである。
- ①女子大学のキャリア教育のコンセプトに関する表現は多様であるが、その趣旨は建学の精神を背景としながら「生涯にわたる女性のキャリア支援」を行うことにある。
 - ②女子大学のキャリア教育で育成すべき力は、「キャリアデザイン力」「就業力」に大別される。
 - ③キャリア教育の体制は「正課教育」「正課外教育」「各種組織等との連携」の3つの部分から構成されている場合は多い。
 - ④「正課教育」として多くの大学にみられる科目は「キャリアデザイン」「インターンシップ」である。
 - ⑤「正課外教育」は、キャリアサポート課（就職指導課）等が行い、カウンセリングや各種就職支援を行っている。一方で、金城学院大学のような同窓会や企業、自治体等との連携が行われている場合や、日本女子大学のように、女性キャリアに関する研究所を有する大学もあり、各大学で特徴的な取り組みがみられた。
 - ⑥その他の特徴としては、実践女子大学や白百合女子大学、相山女学園大学のように、ポートフォリオを用いたキャリア教育を展開する大学がいくつかみられた。
 - ⑦文部科学省GP等の取得は、各大学の特徴あるキャリア教育開発の契機となっている。
- 以上の分析結果から、伝統的な女子総合学園の建学の精神は、21世紀の男女共同参画社会の担い手を育成するキャリア教育において、改めて確認されるべきものであり、それは女性の多様なライフスタイルを支持し、自由で柔軟なキャリアデザインを支援するものであった。

(5)提案や新たな課題

今回の分析では女子総合学園の大学のみを対象に分析を行ったが、大学入学前の中学校・高等学校におけるキャリア教育や、卒業生や地域に向けたリカレント教育としてのキャリア教育にも目を向けていく必要があるだろう。

第10回（2014年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究

(2)研究の目的

女子大学に在籍する学生たちの大学への進学動機と今後の理想のライフコースについて明らかにするとともに、キャリア教育に関するこれまでの経験と今後の希望をとらえ、学生のニーズに合ったキャリア教育の在り方を追究する。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

本学の教養系の学部である国際コミュニケーション学部、人間関係学部、文化情報学部、現代マネジメント学部の4学部に在籍する1～3年生を調査対象（N=1345）とし、アンケート調査（2014年11～12月調査）を実施した。質問項目は以下の5項目である。

- ・大学進学に関する意思決定に関する事項（進学理由、学部・学科選択）
- ・大学入学と資格取得に関する事項（入学時における資格取得の希望、目指していた資格）
- ・理想のライフコースと価値観に関する事項 ・卒業時の職業選択に関する事項
- ・キャリア教育の経験と希望に関する事項

調査結果は全体および学部別に集計し、全体的傾向を把握し、学部間の比較分析を行った。

(4)研究結果

女子大生の進学動機と今後の理想のライフコース調査からは以下の4点が明らかとなった。

- ①教養系学部 に在籍する学生たちは、総じて明確な動機を意識することなく大学へ進学しているが、学部・学科の選択にあたっては、6割が就職を意識しており、8割以上が資格取得を目指している。
- ②理想のライフコースは、結婚・出産により退職し、子育て終了後再就職するという「再就職型（M字型）」への支持が6割を超え、家事・育児と仕事の「両立」を目指そうとする学生は2割未満である。「再就職型」を志向するわりには、「子育て」を重視する志向は相対的に低く、「社会貢献」への関心も希薄である。
- ③仕事に関しては、半数以上が卒業後に就きたい職種・職業を決めていないが、ほとんどの学生が「正規の職員・従業員」として「会社員」になりたいという漠然とした希望を有している。就職先を決めるにあたっては、「職場の雰囲気・人間関係が良い」ことや「経営・雇用が安定している」ことなどを重視している。
- ④キャリア教育に関しては、主に大学の授業で「働く女性の現状」や「ロールモデルや卒業生の体験談」、「生活設計の方法」などについて学び、キャリアサポート課のイベント等で「就職のために今すべきこと」、「就職採用試験の内容」、「就職活動に必要な具体的なスキル」などについて学んでいる。授業での学習状況については、学部の特性による違いが大きい。今後、学生たちがキャリア教育で学びたい内容をみると、「就職採用試験の内容」、「就職活動に必要な具体的なスキル」、「就職のために今すべきこと」が上位を占め、キャリアサポート課が取り組む内容が強く求められている。行動力や主体性、リーダーシップをもち、結婚、出産を経てなお、男性と同等に職業能力や社会的能力を発揮できる活力ある女性たちを輩出することが求められている。

(5)提案や新たな課題

1、「早期からのキャリア教育への取組」。2、「大学の授業におけるキャリア教育の取組とキャリアサポート課による取組の棲み分け」を明確にすること。3、「女子大学におけるキャリア教育のアピールポイントの明確化」。キャリア教育については、共学校以上に授業とキャリアサポート課と卒業生（同窓会）等との連携が重要となる。これらを統合し、人生のさまざまなステージにおいて、周囲の人々との関係を大切にしながら、自らの生きる道を自ら切り拓いていくことができるような女性を育成するための人間教育が、女子大学の一貫した社会的使命である。こうした結論を受けて本プロジェクトでは、今後も広く卒業生のロールモデルの紹介や、生涯にわたるキャリア教育の一助としての教材を作成していくことを今後の課題とする。

第11回（2015年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究—専門職養成学部を中心に—

(2)研究の目的

専門職養成学部の学生に対して、キャリアデザインに関する実態とキャリア教育の課題を明確にするとともに、昨年との比較によって、教養系、専門職養成系の差異並びに共通点を検討することにより、大学への進学動機と今後の理想のライフコースについて明らかにし、それぞれの学生のニーズに合ったキャリア教育の在り方を追究する。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

本学の専門職養成学部である生活科学部、教育学部に在籍する1～3年生を調査対象（N=787）とし、アンケート調査（2015年6～7月調査）を実施した。調査項目を以下に記す。

- ・大学進学に関する意思決定に関する事項（大学進学理由、学部・学科の選択）
- ・大学入学と資格取得に関する事項（大学入学時における資格取得の希望、大学入学時に取得を目指していた資格）
- ・理想のライフコースと価値観に関する事項（卒業後の理想のライフコースなどについて）
- ・卒業後の職業選択に関する事項（就きたい職業・職種に関する意思決定、就きたい職業、希望する雇用形態、就職先を決める上で重視すること）
- ・キャリア教育の経験と希望に関する事項（将来のキャリア形成に関してこれまでに学んだ（体験した）こと、将来のキャリア形成のために大学で学びたい（体験したい）こと、女子総合学園のキャリア教育について思うこと）

調査結果は、全体および学部別に集計した。

(4)研究結果

女子大生の進学動機と今後の理想のライフコース調査からは以下の4点が明らかとなった。

- ①女子大学の専門職養成学部 に在籍する学生たちは、総じて明確な職業志向をもって進学しており、学科選択についてはそれなりに考えて選んでいる。特に教育学部にその傾向が顕著である。
- ②しかしながら、理想のライフコースについては、「結婚・出産後も変わらずフルタイムで働く」を希望している人よりも、むしろ「出産退職後子育てが落ち着くまで専業主婦・その後パートで働く」が圧倒的に多い。いわゆるM字型のライフコースを希望している人々が多いという結果になった。
- ③仕事に関しては、明確な職業志向があるものの、必ずしもすべての学生が在籍学部で取得できる資格などと直接関係すると思われるものを希望しているわけではなく、その学部の中であって、自分なりの仕事を模索している状況もみられた。
- ④キャリア教育に関しては、学びの経験が少ないことがわかった。その一方で、学びのニーズはかなり高い傾向にあったので、中学・高校などにおいてもあまり学んでいないということを前提に大学でのキャリア教育の充実が必要であろう。学びのニーズは、インターンシップなどの充実や体験談を聴くことや具体的な就職支援に向けられていた。つまり、キャリア教育とはいうものの、その要求のほとんどは「職業キャリア教育」に関するものであった。

(5)提案や新たな課題

1点目は、個別の学生目線でのキャリア教育の必要である。2点目は、職業キャリア分野に関する教育について、授業として実施するものと、キャリア支援課などで支援するものとの整理、棲み分けが必要である。3点目は、女子大学ゆえの利点と課題を踏まえたキャリア教育の必要性である。2015年には「女性の活躍推進法」も施行され、女性の生き方働き方に関わる社会の情勢は大きく変化してきている。そのような状況にあって、社会で活躍できる女性たちを育成するためにはどのような教育が必要であるかについて、大学の特性を踏まえながら検討すべきである。単なるマナー教育にとどまることなく、今後の社会において、それぞれの女性たちがその人らしく輝けるようなキャリア教育を模索していく必要がある。

第12回（2016年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

女子大学におけるキャリア教育の比較研究

(2)研究の目的

本学園高等学校の教員に対して、調査を実施し、高等学校のキャリア教育の実態と課題を明確にするとともに、昨年までの調査結果と合わせて、女子総合学園におけるキャリア教育の在り方について検討した。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

本研究では、本学園高等学校のうち担任をもつ教員30名を対象に2016年7月アンケート調査を実施した。有効回答数は27で、9割の回収率である。調査内容は以下のとおりである。

- ①キャリア教育の推進が求められていることの認識
- ②キャリア教育に関する資料や情報の収集状況
- ③ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施の現状
- ④ホームルームにおける進路指導の現状
- ⑤ホームルームあるいは学年におけるキャリア教育の計画・実施に関する生徒や保護者の現状
- ⑥ホームルームのキャリア教育について困ったり悩んだりしていること
- ⑦ホームルームでキャリア教育を行う上でどのようなことに重点をおいて指導しているか
- ⑧ホームルームでキャリア教育を行う上で、今後どのようなことが重要になると思うか

調査結果は、全体的傾向を把握するとともに、参考にした国立教育政策研究所の「キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書」内の「高等学校・ホームルーム担任調査」の結果と比較検討した。

(4)研究結果

本学園の高校の教員に、キャリア教育の必要性は理解されているものの、時間的な制約や情報不足などによって、十分にキャリア教育がなされているとはいえない状況であった。積極的に、キャリア教育に関する資料や情報の収集にあたるということもあまりしていなかった。また、キャリア教育を行っている場合でも、いわゆる従来型の進路指導にとどまっている傾向にあった。進路指導については、生徒本人の希望のみならず、本人の成績状況、保護者の意見・希望、生徒の仲間関係による進路指導など、多くの要素を踏まえての指導がされていた。今後は、それらに加えて、人生キャリアを見据えたキャリア教育の推進が必要であろう。生徒は、それほど自発的には、自分の将来に向けての取り組みをしているわけではないが、キャリア教育の場においては、真剣に取り組んでいたのも、教員側からの働きかけ次第では、生徒のキャリアについての意識を高めていくことは可能だと思われる。現在においても、教員は生徒の主体性を引き出すことに主眼をおいてキャリア教育実践に取り組んでいたが、さらに生徒たちの主体的な学びを引き出す工夫が必要とされているといえよう。そのためにも、キャリア教育にかける生徒・教師双方の時間の確保が望まれる。

文科省調査と本調査の結果は、概ね同様の傾向を示していたが、キャリア教育の推進が求められていることの認識、キャリア教育に関する資料や情報の収集状況、キャリア教育の計画・実施の現状や、キャリア教育を実施する十分な時間が確保できないといった項目で、本調査の方がやや思わしくない傾向にあった。しかしながら、本調査の実態においては、やや従来型の進路指導中心のキャリア教育に偏っている傾向にあったものの、今後どのようなことが重要になると思うかという問いに対しては、生き方全体に関するキャリア教育の重要性や現在不足している体験的なキャリア教育の充実の必要性などが文科省調査と比べてより高く指摘されていた。

(5)提案や新たな課題

キャリア教育の重要性は十分に認識されているものの、現実には生徒の学習時間、教員の準備時間など時間の確保という課題があることがわかった。今後は、高大で連携することにより、大学の持っている情報・人的資源などを積極的に提供し、それらを活用することにより、時間の制約をカバーし、より密度の濃いキャリア教育の可能性をともに模索していきたい。

第13回（2017年度）「女性論」プロジェクト研究報告 概要

(1)研究報告タイトル

今年度の活動報告—「女子大学卒業生のライフコースに関する調査」を中心に—

(2)研究の目的

2017年度の活動として、『私のキャリアマップ』の改定を行い、『ロールモデル集・相山発の女性たち Vol. 2』を発行した。『ロールモデル集・相山発の女性たち Vol. 2』の発行に際して実施した「女子大学卒業生のライフコースに関する調査」の概要報告を中心に、2017年度のプロジェクトの活動を報告することを目的としている。

(3)研究の方法（調査対象者／調査方法／分析方法）

「女子大学卒業生のライフコースに関する調査」について、以下の様に報告している。

対象者一覧

| 番号 | 氏名(記号) | 年代 | 卒業年月日 | 学部 | 学科 | 職業・活動などの特徴 |
|----|--------|--------|---------------------|--------------|---------------|-----------------|
| 1 | A氏 | 40歳代前半 | 2000年3年 (家政学研究科) | 生活科学部 | 管理栄養学科 | 研究所特任講師 |
| 2 | B氏 | 40歳代前半 | 2001年 | 生活科学部 | 生活環境デザイン学科 | 栄養士 |
| 3 | C氏 | 31歳 | 2008年3月 | 国際コミュニケーション部 | 国際コミュニケーション学科 | 会社員、育休中 |
| 4 | D氏 | 32歳 | 2007年3月 | 国際コミュニケーション部 | 表現文化学科 | 国際結婚、趣味の演劇、海外在住 |
| 5 | E氏 | 36才 | 2004年3月 | 人間関係学部 | 人間関係学科 | 会社員、育休中 |
| 6 | F氏 | 37才 | 2003年3月 | 人間関係学部 | 人間関係学科 | 専業主婦 |
| 7 | G氏 | 36才 | 2008年3月 | 人間関係学部 | 心理学科 | 臨床心理士 |
| 8 | H氏 | 28才 | 2011年3月 | 文化情報学部 | 文化情報学科 | SE |
| 9 | I氏 | 25才 | 2014年3月 | 文化情報学部 | メディア情報学科 | アナウンサー |
| 10 | J氏 | 20歳代 | 2014年3月 | 現代マネジメント学部 | 現代マネジメント学科 | 公務員 |
| 11 | K氏 | 20歳代 | 2015年3月 | 教育学部 | 子ども発達学科 | 大学院在学中 |
| 12 | L氏 | 20歳代 | 2011年3月 | 教育学部 | 子ども発達学科 | 小学校教諭、育休中 |
| 13 | M氏 | 20歳代 | 2015年3月 | 看護学部 | 看護学科 | 看護師 |

主な質問項目

- ①プロフィール ②ライフコース ③大学・学部への進学動機 ④在学当時の学生生活
⑤卒業後活かされた学び・経験 ⑥在学生へのメッセージ

(4)研究結果

それぞれの学部学科での学びを直接的に活かして活躍している人がある一方で、さらなる学びを深めている人、学部の専門性が直接関係しているわけではないものの、大学での学びを活かして充実した日々を送っている人など、多種多様な女性たちの人生を垣間見ることができた。そんな活躍の様子を一冊の冊子にまとめることができた。

(5)提案や新たな課題

現代における女子大学をめぐる状況は新たなステージに入っている。トランスジェンダーをめぐる入学許可論争がアメリカにおいておこり、日本においても一部の女子大学においてはすでに何らかの方向性が示されている。このような状況下において、女子大学として女子学生へのキャリア支援をどのようにすべきか、女性のライフコースとどのようにコミットしていくのかというような課題は以前にも増して、重要課題になってきている。来年度以降は、これらの問題についても議論を重ね、そのために必要な調査・研究を共同で行っていききたい。

3. 13年間の研究報告の動向分析

次に、2005年度から2017年度の13年間の研究報告を研究対象・研究方法・研究内容別に整理すると、表1のとおりである。なお、2005年度の研究報告書には、教員に対するインタビュー調査、学生に対するアンケート調査、女性学・ジェンダー関連カリキュラム調査の3つの調査結果が掲載されているため、それぞれについて一覧表に整理した。また、2006年度の研究報告書には2編の異なる論文が掲載されている。したがって、表1では全16編の研究報告を分析対象とした。

1) 研究対象

女性論プロジェクトの研究では、毎年、中学校、高等学校、大学（大学院を含む、以下同様）、大学卒業後の学校段階別に、学生・生徒、卒業生、教員、資料等のいずれか、あるいは複数を対象に研究を実施してきた。このうち、学校段階では大学が、対象別では学生・生徒が最も多く研究対象となっている。大学を研究対象とした報告は12編と全体の4分の3を占め、そのうち学生（大学生、大学院生）を研究対象とした報告が6編、カリキュラムや教材を含む資料等を研究対象とした報告が5編、教員を研究対象とした報告が1編である。女子総合学園のキャリア教育についての研究というテーマであったものの、研究対象については、大学に偏る傾向にあった。

2) 研究方法

研究方法についてみると、16編の報告のうち、7編でアンケート調査、4編でインタビュー調査を実施しており、残りの5編は文献調査（収集した資料の分析）である。なお、7編のアンケート調査のうち、6編が大学生

を対象としている¹⁾。

3) 研究内容

この間の女性論プロジェクトの研究内容は、概ね、生き方（人間像・女性像、人生観）、働き方と性役割（ワーク・ライフ・バランス、性役割、男女共同参画社会についての考え）、ライフコース（理想のライフコース、予想されるライフコース、卒業後のライフコース等）、進路選択・資格（進学動機、職業・職種・雇用形態の希望、資格取得の希望等）、教育活動（実践している教育活動、カリキュラム、教材等の特徴・提案、女子教育機関としての認識等）、学習活動（学生が学習した内容、大学で学びたいこと、卒業生にとって卒業後、活かされた学び等）、その他（卒業生による学生生活のふりかえりや大学生へのメッセージ、分析手法としての大学の学部別特徴や学年別特徴の比較等）に分けてとらえることができる。各報告は、複数の研究内容に関わっているが、このうち、最も多く取り上げられてきた研究内容は、ライフコースと教育活動でそれぞれ13編、次いで進路選択・資格が12編、働き方と性役割ならびに学習活動がそれぞれ10編と続く²⁾。

ライフコースについてみると、特に「理想のライフコース」をとらえようとする研究内容が8編と多く、うち6編で大学生の「理想のライフコース」が取り上げられている。また、このうち5編で学部別の比較を、1編で学年別³⁾の比較を行っている。特に、2007年度、2008年度、2012年度の3つの研究は、同じ設問に基づいて、「理想のライフコース」の学校段階別の差異、大学学部別の差異、大学全体及び学部別の時系列的変化をそれぞれとらえた研究である。また、2014年度、

表1 「女性論」プロジェクト研究報告（2005～2017）にみる研究動向

| 発行年度 | 研究テーマ (一部、研究項目を含む) | 研究対象 | | | | | | | |
|------|--|-------|------|----|-------|-------|-----|----|---------------|
| | | 学校段階等 | | | | 対象 | | | |
| | | 中学校 | 高等学校 | 大学 | 大学卒業後 | 学生・生徒 | 卒業生 | 教員 | 資料・論文等 その他 |
| 2005 | 教員に対するインタビュー調査について | | ○ | ○ | | | | ○ | |
| | 学生に対するアンケート調査について | | | ○ | | ○ | | | |
| | 女性学・ジェンダー学関連カリキュラム調査について | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ |
| 2006 | 男女共同参画を推進する女子大学における女性人材育成プログラム —お茶の水女子大学「女性リーダー育成プログラム」と 奈良女子大学「地域の変革を促す女性人材育成プログラム」の比較研究— | | | ○ | | | | ○ | |
| | リーダーシップの育成と大学教育～多様性と環境変化への対処に向けて～ | | | | ○ | | | | ○ |
| 2007 | 学校段階別にみたライフスタイルの将来展望 | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | |
| 2008 | 女子大生の専攻分野別にみたライフスタイルの将来展望 | | | ○ | | ○ | | | |
| 2009 | 女子大卒業生のライフコースに関する一考察—25事例の分析— | | | | ○ | | ○ | | |
| 2010 | 女子学園におけるキャリア教育用教材開発に関する実践的研究 | ○ | ○ | ○ | | | | | ○ |
| 2011 | 女子大学卒業生のライフコースと女子大学の特性に関する研究 —20代から80代の卒業生へのインタビュー調査を手掛かりに— | | | | ○ | | ○ | | |
| 2012 | 女子大生のライフスタイルの将来展望に関する近年の動向分析 | | | ○ | | ○ | | | |
| 2013 | 女子大学におけるキャリア教育の比較研究 | | | ○ | | | | | ○ |
| 2014 | 女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究 | | | | | | | | |
| 2015 | 女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究 —専門職養成学部を中心に— | | | ○ | | ○ | | | |
| 2016 | 女子高等学校のキャリア教育に関する研究 | | ○ | | | | | ○ | |
| 2017 | 「女子大学卒業生のライフコースに関する調査」を中心に | | | | ○ | | ○ | | |

2015年度の2つの研究も、同じ設問に基づいて「理想のライフコース」の学部別（教養系学部と専門職養成学部）の差異を明らかにしたものである。このほか、卒業後の「現実のライフコース」をとらえた3編の研究がみられる。

教育活動については、その実態を明らかにするための研究内容として、教員や教育機関が実践しているキャリア教育等の教育活動の

ほか、本学及び他大学のカリキュラムやプログラムの調査、教材の制作につながる調査などがみられる。特に、2010年度は教材「私のキャリアマップ」の制作に、2011年度と2017年度は、教材「ロールモデル集 嵯峨山発の女性たち」（初版とVol. 2）の制作に基礎データを提供する研究である。一方、理念的なアプローチとして、女子教育機関としての教育の在り方を追究しようとする研究内容が

| 研究方法 | | | 研究内容（調査項目、関連項目、明らかになったこと等） | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|--------|------|----------------------------|----------------|------------|------------|-----------------|-----------|-------------|-----------------|--------------|-------------|-----------------|--------|---------|------|--------------|-------------|------------|---------------|-----------|--------------|--------------|--------------|---------|---------|-----|
| | | | 生き方 | | 考え方 | | ライフコース | | | 進路選択・資格 | | | 学生生活 （ふりかえり） | | | 教育活動 | | | | その他 | | | | | | | |
| アンケート | インタビュー | 文献調査 | 女性像・人間像 | 人生観（人生で大事なものの） | WLBに対する考え方 | 性役割に対する考え方 | 男女共同参画社会に対する考え方 | 理想のライフコース | 予想されるライフコース | （卒業後の）現実のライフコース | 母親のライフコースと評価 | 大学・学部への進学動機 | うち、将来の職業を考えた進学 | 就きたい職業 | 資格取得の希望 | 学生生活 | 卒業後、活かされた学び等 | 学んでおきたかったこと | 大学生へのメッセージ | カリキュラム等の特徴・提案 | 教材等の特徴・提案 | 実践している教育活動全般 | うち、キャリア教育の取組 | 女子教育機関としての認識 | 大学学部別特徴 | 大学学部別特徴 | その他 |
| | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | |
| ○ | | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | |
| | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | ○ | |
| | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | | | | |
| | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ |
| ○ | | | | | | ○ | | ○ | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | ○ | |
| ○ | | | | | | ○ | | ○ | | | ○ | | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | ○ | |
| | | ○ | | | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | | | ○ | | | | ○ | | | |
| ○ | | | | | | | | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | | | | | ○ | |
| ○ | | | | ○ | | | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | |
| ○ | | | | ○ | | | | ○ | | | | | ○ | ○ | ○ | | | | | | | | | | | | |
| ○ | | | | ○ | | | | | | | | | | | | | | | | | | | ○ | ○ | | | |
| | ○ | | | | | | | | | ○ | | ○ | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | | | | | |

みられる点も重要である。

進路選択・資格については、時系列的にみると、研究期間の後半に集中的に取り組んだ研究内容であることがわかる。特に、2014年度、2015年度の研究報告では、本学学生の進学動機や希望する職種・職業・雇用形態、資格取得の希望等について、教養系学部と専門職養成学部のそれぞれの実態を詳細に把握している。また、卒業生への調査の一部にお

いても、大学・学部を選択した当時の進学動機を尋ねている。

働き方と性役割に関する考え方については、2012年度以前の研究で取り扱われており、教員、学生の考え方を調査した結果や、教材に掲載されている内容を整理したものなどがみられる。

また、学習活動については、2009年度以降の研究で取り扱われている。ここには、卒

業生に対し、大学で学びたかったことや卒業後に活かされた学び等を尋ねた結果と、前述の2014年度、2015年度の研究報告において、教養系学部、専門職養成学部別に進路選択・資格と併せて、広くキャリア教育で学んだ内容や学びたい内容を調査した結果が含まれている。

4. これまでの研究の総括

最後に、上記の研究動向を踏まえ、これまでの研究を総括する。以下では、研究の全体像と独自性、ならびに生徒・学生のキャリア形成の2つの視点から考察を行う。

1) 研究の全体像と独自性

まず、表1に基づいて、これまでの「女性論」プロジェクトの研究の全体像をまとめると、図1のとおりとなる。その独自性を説明するためのポイントとなるのは、以下の5点である。

1つ目は、研究の背景に「時間軸」を据えている点である。ここでは、特に個人の成長・発達過程としての中学生から高校生へ、大学生へ、そして社会人へという「ライフステージの推移」と、中学校から高等学校へ、大学へという「学校段階の推移」が意識されている。

2つ目は、時間軸とクロスする研究対象として、「個人のライフスタイル・ライフコース」⁴⁾が掲げられている点である。本プロジェクトでは、生徒・学生が考える理想のライフスタイル・ライフコースや予想されるライフスタイル・ライフコースを把握し、他方で卒業生が実際に歩んだ多様なライフスタイル・ライフコースを明らかにしている。

3つ目は、時間軸とクロスする、いま一つ

の研究対象として、「学校における教育活動」が挙げられている点である。本プロジェクトでは、各学校段階において、どのような教育が行われているかを、教員の実践、プログラムやカリキュラムや教材の内容からとらえるとともに、卒業生をロールモデルとして教育活動に活用し、上記のとおり、オリジナル教材を作成している。

4つ目は、「時間軸」と「個人のライフスタイル・ライフコース」と「学校における教育活動」の交錯分野に位置づけられる「キャリア教育」の推進である。これは、本プロジェクトの全体的な目標となっている。その対象は「人生キャリア」と「職業キャリア」（地域活動キャリアを含む）を包括するもの（広義の人生キャリア）であり、学生・生徒一人ひとりが、個性や能力を活かした多様な人生・職業の選択をできるようにするための教育の在り方を継続的に検討している。

5つ目は、上記の「キャリア教育」の在り方とも密接に関連する「女子教育機関」の使命の追究である。男女共同参画社会を前提に女性のさらなる活躍推進を目指す社会的要請を受け、女性のおかれている現状を踏まえた女性教育機関の独自性を活かしたキャリア教育の推進を意図して、その使命を追究するものである。

このように、これまでの「女性論」プロジェクトの研究は、「時間軸」の推移を背景に、未来に向かい、学生・生徒一人ひとりが自分自身にとって適切な「ライフスタイル・ライフコース」を選択できるようにするための「学校における教育活動」、すなわち「キャリア教育」の在り方について検討を重ね、そこに「女子教育機関」の使命を見出そうとするも

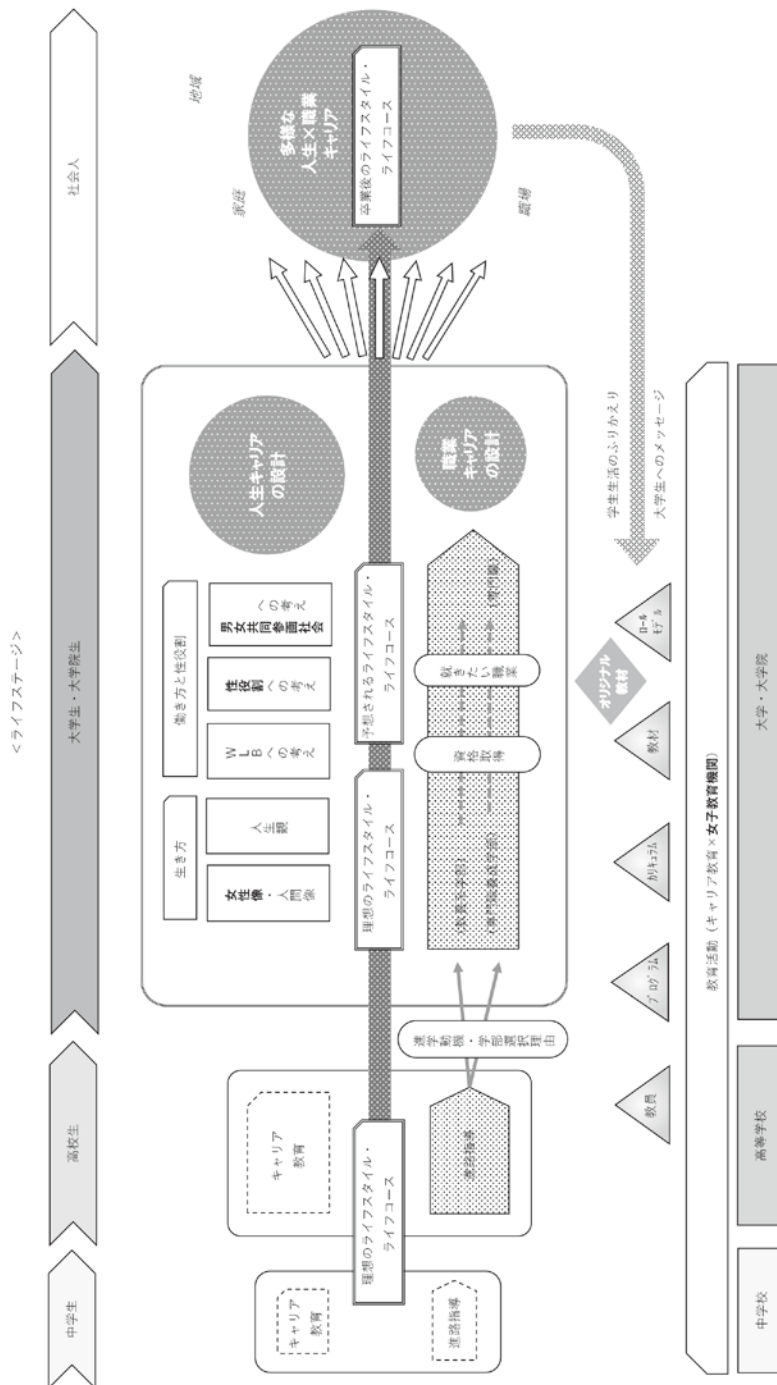


図1 「女性論」プロジェクト研究の総括(1)全体像

のであったといえる。

2) 学生・生徒のキャリア形成能力育成を視点とした研究の総括

最後に、これまでの研究の全体的な目標である「キャリア教育」の推進が目指してきたものについて、さらに詳細にとらえたい。その具体的・中心的課題である「学生・生徒のキャリア形成能力育成」の視点から研究を総括すると、図2のようにあらわすことができる。主体となる学生・生徒は、大学までの学校教育における学びとその先にある生涯学習を通して、過去から現在（今）の自分（私）を振り返ると同時に、未来の自分について見通しをもち、希望の姿を描くことができるようになることを目指す。また、これまでの生活や、なりたい未来を考えると、家庭生活・家族を中心とした狭義の人生キャリアのみならず、地域や社会の中で自分に相応しい役割

を見つけ、それを遂行しようとする地域活動キャリアや職業キャリアも含めて、広く自分らしい生き方を展望できるようになることが、ここでの課題である。

「女性論」プロジェクトの13年間の研究を、このような視点から総括すると、図2の右側に示したように整理することができる。下から上に向かってみていくと、本プロジェクトでは、高等学校や大学におけるキャリア教育の現状やカリキュラムの内容を把握し、学生・生徒の進路選択や職業キャリアを含むライフコースの希望をとらえながら、それを実現するためのライフデザインを支援する教材（キャリアマップ）を作成してきた。また、学生・生徒の未来に向け、女性リーダー育成に関する研究や、ロールモデルとなる卒業生を通して、自分自身の大学における学びの意義や多様な未来の可能性を想像するための教

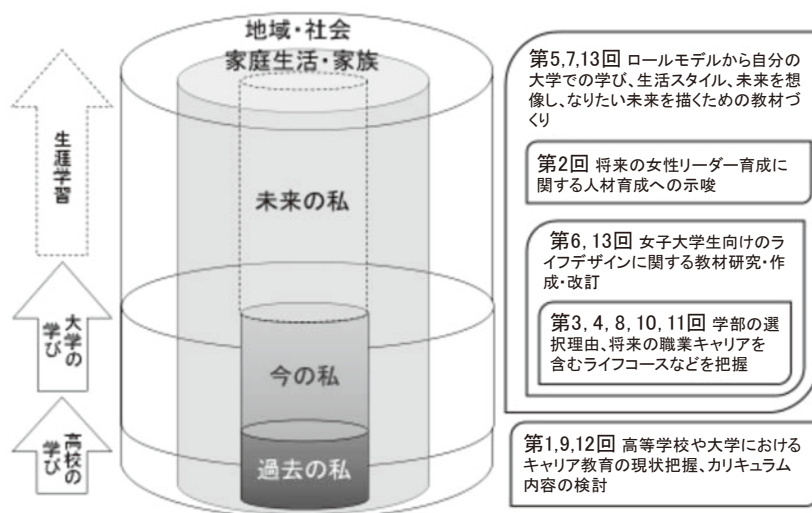


図2 「女性論」プロジェクト研究の総括(2)学生・生徒のキャリア形成能力育成の視点

材（ロールモデル集）の作成にも取り組んできた。これらの教材は、現在、本学において全学共通科目「人間論」の「大学での学び・キャリア教育」の教材の一部として紹介・使用され、学生たちのキャリア形成能力育成のために活用されている。

5. 今後の研究活動の方向性

以上のように、「女性論」プロジェクトの13年間の研究は、学生・生徒のキャリア形成能力の育成を目指して、多面的なアプローチにより遂行されてきた。この間、本学においては、教養教育科目の全学共通化の中で「女性とキャリア」の領域が設定された。また全学共通科目「人間論」の基本的な運営方法が確立され、前述のように「大学の学び・キャリア教育」（全4時間）が設置され、キャリア教育の基礎は形成された。

その結果、かつて指摘されていた学部間でのキャリア教育の格差については解消されることとなったが、一方で、従来専門教育において女性学・ジェンダー関連科目を多数開講していた学部において、その科目数が減少傾向にある。したがって、今後も、さまざまな専門分野にある学生たちが、それぞれの特性に応じたジェンダー教育やキャリア教育を受ける機会を十分に得て、個性や能力に応じた多様な未来を描くことができるように、引き続き一層きめ細やかな、そして主体性を重視したジェンダー教育およびキャリア教育（キャリア学習）の在り方を追究していく必要がある。

また、今後の活動に関するいま一つの方向性は、これまでも検討を重ねてきた「女子教育機関」の使命や役割に関わるものであ

る。その一つは、18歳人口の減少に伴い共学志向の高まりが予想される中で、女子教育機関の存在意義や社会的使命を明確に打ち出すことができるような研究へのチャレンジである。また、このこととも関わって、二つ目として、2015年に制定された「女性活躍推進法」の理念や具体的な施策を踏まえた女性活躍推進型のキャリア教育に関する研究への取り組みを挙げることができる⁵⁾。さらに、昨今、社会的な関心の高い女子大学におけるトランスジェンダー女性の入学というテーマに積極的にアプローチしていくことも、これからの女子教育機関の在り方を考える上で、避けては通れない課題といえよう⁶⁾。

本報告で総括したこれまでの研究の蓄積を踏まえながら、今後も「女性論」プロジェクトとして、女子学園、女子大学に学ぶ学生・生徒の未来に有益な研究を重ねていきたい。

注

- 1) このうち1編は中学生・高校生・大学生を対象としている。
- 2) 「その他」（12編）を除く。
- 3) 1・2年生と3・4年生の比較である。
- 4) 厳密には、「ライフコース」にはすでに時間軸が含まれている。
- 5) この点については、2015年度「女性論」プロジェクト研究報告「女子大学のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究—専門職養成学部を中心に—」のまとめにおいて詳述している。
- 6) この点については、2017年度「女性論」プロジェクト研究報告「女子大学卒業生のライフコースに関する調査を中心に」の結語において詳述している。

引用・参考文献

東珠実・太田ふみ子・影山穂波・塚田文子・藤原直子・森川麗子「『女性論』プロジェクト研究報告」、『椋山人間学研究』第1号（2006）、pp. 56～88。

東珠実「男女共同参画を推進する女子大学における女性人材育成プログラム—お茶の水女子大学「女性リーダー育成プログラム」と奈良女子大学「地域の変革を促す女性人材プログラム」の比較研究—」、『椋山人間学研究』第2号（2007）、pp. 52～62。

東珠実・太田ふみ子・影山穂波・塚田文子・藤原直子「学校段階別に見たライフスタイルの将来展望—女子学園の実態調査をもとに」、『椋山人間学研究』第3号（2008）、pp. 54～67。

東珠実・太田ふみ子・小倉祥子・影山穂波・塚田文子・藤原直子「女子大生の専攻分野別にみたライフスタイルの将来展望—学部別比較研究—」、『椋山人間学研究』第4号（2009）、pp. 118～132。

東珠実・太田ふみ子・小倉祥子・塚田文子・藤原直子・吉田あけみ「女子大卒業生のライフコースに関する一考察—25事例の分析—」、『椋山人間学研究』第5号（2010）、pp. 124～146。

東珠実・太田ふみ子・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・塚田文子・藤原直子・吉田あけみ「女子学園におけるキャリア教育用教材開発に関する実践的研究」、『椋山人間学研究』第6号（2011）、pp. 112～130。

東珠実・太田ふみ子・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・塚田文子・藤原直子・吉田あけみ『SUGIYAMA 私のキャリアマップ MY CAREER MAP』椋山人間学研究センター

（2011）。

東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・塚田文子・藤原直子・吉田あけみ「女子大学卒業生のライフコースと女子大学の特性に関する研究—20代から80代の卒業生へのインタビュー調査を手掛かりに一」、『椋山人間学研究』第7号（2012）、pp. 110～136。

東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ『ロールモデル集 椋山発の女性たち』（2013）。

東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大生のライフスタイルの将来展望に関する近年の動向分析」、『椋山人間学研究』第8号（2013）、pp. 150～166。

東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大学におけるキャリア教育の比較研究」、『椋山人間学研究』第9号（2014）、pp. 164～180。

東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究」『椋山人間学研究』第10号（2015）、pp. 141～163。

東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉田あけみ「女子大生のキャリアデザインと女子大学のキャリア教育に関する研究—専門職養成学部を中心に—」『椋山人間学研究』第11号（2016）、pp. 134～155。

吉田あけみ・東珠実・小川奈保子・小倉祥子・影山穂波・藤原直子「女子高等学校のキャリア教育に関する研究」『椋山人間学研究』第12号（2017）、pp. 139～152。

吉田あけみ・東珠実・小倉祥子・影山穂波・
藤原直子『ロールモデル集梶山発の女性たち
Vol. 2』梶山人間学研究センター(2018)。
東珠実・小倉祥子・影山穂波・藤原直子・吉
田あけみ『私のキャリアマップ』改訂版

梶山人間学研究センター(2018)。
吉田あけみ・東珠実・小倉祥子・影山穂波・
藤原直子「女子大学卒業生のライフコース
に関する調査を中心に」『梶山人間学研究』
第13号(2018)、pp. 134～138。